

金目観音と南金目自由民権の里を訪ねる

1. 金目山光明寺（別称金目観音） 天台宗 （『平塚の文化財』、『神奈川県史散歩』他）

（1）県下名勝史跡四十五佳撰「金目観音」の記念碑（第38位、38196票）～横浜貿易新報社（現神奈川新聞）が昭和十年に創業45年を記念し、読者の投票により四十五佳撰が決定した。

（2）由緒・歴史

- ①創建 （伝）大宝2年（702）
- ②本尊 聖観世音菩薩 ③開基 （伝）道儀
- ④縁起・歴史

- 大宝2年(702) 漁師(鮎)が、相模国小磯の浜でたまたま長さ7寸の観音像を拾い上げた。これにより威霊盛んになる。天平中(729~749) 行基が観音像を彫り、前記観音像をその中に納めると、その威徳はますます盛んとなった。
- 応永(1394~1428) 中は戦乱で寺社は疲弊したが、元和年中(1615~1624) には復旧した。その後度々金目川の洪水で堂舎が崩壊したが、元禄10年(1697)に再興した。
- 中世には源頼朝の帰依を得て、寺領の寄進を賜った。室町時代には足利尊氏や関東公方の保護を受けた。江戸時代には幕府の帰依を得て、元禄10年(1697)伽藍が復興され、明治初期には一時衰退したが、近年（昭和58年～61年）に復興された。

（3）三十三観音霊場 第七番札所

- 金目観音は、永延2年(988) 花山法皇の勅命により「坂東三十三所巡礼第七番」に定められたという伝承があるが、後述のとおり鎌倉初期に坂東三十三観音霊場が開設され第七番札所に確定したものと推測される。
- 第一番 大蔵山杉本寺（杉本観音） 第五番 飯泉山勝福寺（飯泉観音）
第六番 飯上山長谷寺（飯山観音） 第八番 妙法山星谷寺（星谷観音）

①観音（観世音菩薩）信仰

- 観音信仰は、「法華経」の伝来と共に移入されたもので法華経のうち「観音経」（観音菩薩普門品）によれば観音は、人々の救いを求める声をすべて聞き取るために身を三十三の姿に変えて救済する仏である。三十三観音の三十三という数字もこれに起因している。観音は、極めて現世利益色の濃い、庶民信仰の仏である。
- 観音像には、基本となる聖観音（正観音）、六観音、十五観音、三十三観音などと呼ばれる様々な観音像がある。

②観音巡礼は、各寺院の観音を巡り、救済を求め、自分を見つめ直し、生きていることの素晴らしさを実感する信仰の旅である。平安時代中期に僧侶達の修行の一つとして始まったといわれ、西国三十三観音霊場巡りが最初の観音霊場巡りである。

③坂東三十三観音の歴史

源平の戦いの後、敵・味方なく供養や永い平和への祈願が盛んになり、源頼朝の篤い観音信仰と多くの武者が西国で見聞した西国三十三観音霊場への想い等が結びつき、鎌倉時代初期に坂東三十三観音霊場が開設された。室町末期に秩父三十四観音霊場を加え、日本百観音霊場へと発展し、観音巡礼も江戸時代の隆盛を経て今日に至っている。（『坂東札所の歴史』）

（4）安産祈願所

源頼朝の室政子が実朝の無事安産を祈念したことより安産の観音として崇られ、腹帯をうける信徒も多く、所願みなかなうことからかなひの観音といわれている。
また、当時「金目」を「かなひ」あるいは「かなえ」といった。

(5) 文化財(『平塚の文化財』平塚市教育委員会)

①重要文化財(国指定)～本堂内厨子(附:木造聖観世音菩薩立像)一基 一間厨子
入母屋造 本瓦形板葺 明応7年(1498)造立

○光明寺の本尊である木造聖観世音菩薩立像は秘仏で、本厨子の中に安置されている。
秘仏は、六十年に一度の寅年にご開帳される(次のご開帳は2034年)。
厨子の様式は、鎌倉地方に見られる室町時代後期の典型的な禅宗様(唐様)である。

○像高85.5cmの前立ちの像(秘仏として本厨子の中に安置されている本尊に代わってその前に安置される仏像)があり、その胎内の墨書銘から厨子の造立が明応7年(1498)であることが推定される。

②神奈川県指定重要文化財

(1) 光明寺観音堂(本堂)一棟 明応7年(1498)建立(推定)

○一重宝形造 柿葺銅板葺 桁行131.9cm、梁行133.3cm

○宝形造(方形造)は、四の三角形の面で構成されている屋根の形である。
光明寺は、明応年間(1492~1501)に一山にわたる再建事業を行った。本堂内厨子内の前立観世音菩薩立像の胎内銘などから、明応2年に本尊と仁王(金剛力士)像と仁王門の再建・修理が行なわれ、同7年には、厨子と前立の観音像の造立及び本堂の供養が行われた。現在の本堂は、この明応7年の本堂供養時に建立されたと考えられる。

○その後本堂は、元禄9~10年(1696~1697)に大修理がおこなわれ、向拝を儲け、細部の装飾が付加され、屋根も茅葺宝形造にしたものの、昭和58~61年の解体修理によって建立当初の形に復元された。

(2) 木造金剛力士像 十四世紀南北朝時代造立(関東最古の像で風土記稿によると運慶作)。
明応2年(1494)修理(鑑)

○一玉眼嵌入 彩色、像高 阿形像 284cm、吽形像 292cm

○金目観音の山門である仁王門の左右に祀られている。正面向かって右が阿形像で、左が口を閉じた吽行像ある。両像とも頂部に髻(たづ)を結び上半身は裸で腰に裳を付ける。

(3) 光明寺銅鐘 総高107cm口径55cm、正平7年(1352)鑄造(本堂内陣の左奥に保管)

○銘文には、鑄造年代及び光明寺の住職空忍が勧進して、法眼・智国と結縁(仏道に縁を結びたい人々)が願主となって、大工河内権守清原国吉が鑄造したとある。なお、清原氏は厚木市飯山(印山、い山、鑄山)の鑄物師であった可能性が高いと言われている。

○正平7年は、観応3年(北朝の年号)にも当たり、南北朝時代の正平(南朝)の年号を使ったことで光明寺が足利尊氏の影響下にあったことが間接的に窺えるという。

【厚木市周辺の清原氏の作例】 (『厚木市史中世』)

- ①貞和6年(1350) 大工中務丞 清原宗弘 厚木市中依知 浅間神社鐘(鎌倉時代)
- ②貞治4年(1365) 大工山城権守清原宗光 厚木市飯山 金剛寺鐘(亡失)
- ③至徳3年(1386) 大工河内守(清原)国宗 伊勢原市下糟屋 高部屋神社鐘
- ④嘉吉2年(1442) 大工河内権守清原国光 厚木市飯山 長谷寺鐘(六番札所)
(寛2年(725)鐘)~(寛141a口徑81a)

* 星谷寺の鐘 嘉禄3年(1227) 大工源吉国(飯山に居住した鑄物師森氏と推定)
(関東以北では一番古い鐘。日本最古は698年の京都妙心寺の鐘)

③平塚市指定重要文化財

(1) 木造聖観世音菩薩立像～造立年代は平安時代から鎌倉時代まで様々な説がある

○金目観音堂の本尊で、厨子内に安置されている。厨子の前には、前立ちとして木像を置き、眷属として木造観音三十三応現身立像を祀る。寄木造・彫眼・素木、像高167.7a。

○台座は、明応2年(1493)に補造されたもので、百人を超える名前の墨書がある。なかでも太田道灌の名が目目を惹くが、僧侶はもちろん百姓、女性と思われる名前まで多くあり広範の人々が、明応年間の光明寺再建事業を援けたことがわかる。

(2) 木造観音三十三応現身立像(内陣の左奥) 一木造彫眼彩色、高53.5~60.8a

○光明寺の本尊、木造聖観世音菩薩立像の眷属として本堂内の脇壇に安置されている。観音音経によれば、観音菩薩は教えを説く相手や場所に応じ三十三種の姿に変化するといひそれを三十三応現身という。造立年代は、室町時代初期と推測される。

○童女新像の底部に明応7年(1498)の彩色銘があるが、造立時の銘ではなく、修理時のものと考えられる。

(3) 金目観音堂二(仁)王門~八脚門、入母屋造銅板造(桁行784.8a 梁行424.2a)

○昭和62年の解体修理の際、多数の墨書銘が発見され、元禄11年(1698)に本堂に引き続いて解体修理がされたことが明らかになった。解体された部材の一部が元禄年間より古いことがわかり、その形態から室町時代末期(16世紀中頃)のものと推測される。

○中に木造金剛力士立像を祀る。二王とは、仏法守護のため寺門の両脇に立つ二人の金剛神をいうが、その胎内にある「二王再興」の墨書銘に、仏師の名と共に「大工明王太郎末孫吉宗」と脇大工の名があることから、明応2年(1493)に、二王の修理と共に二王門の再建あるいは修理が行われたことがわかる。

(4) 光明寺古文書二巻~10通の古文書(巻本)があるが、主なもの3通は次の通りである。

○頼朝下文~治承7年(1183)。源頼朝が金目観音堂の寺務を司る長官(別当職)に大法師源信を任命した辞令。光明寺がその後寺領の権利を主張する根拠になる重要な文書。

○斯波家長奉書~建武3年(1336)。鎌倉府の執事の斯波家長が光明寺とその寺領に対する不当な干渉などを禁止した文書。

○足利尊氏御判御教書~文和4年(1355)に足利尊氏が天下静謐の祈禱を命じた教書。

(5) 光明寺縁起書(概要は前述の通り)

○宝永7年(1710)、遠江国浜松城主松平宗俊の家臣である田副秀典が、金目観音堂の縁起を聞き、それを記して奉納した巻本である。

【自由民権の里 南金目】~明治の文化村南金目

①神奈川県下の民権運動は、関東でも屈指の活動を展開した地域である。明治14年(1881)に国会開設請願運動が一つの山場を迎えたこの時期に大住(南金目、伊勢原)・洵綾(大磯)両郡は、豪農を中心に署名活動や民権学習活動で高いレベルの運動を実践した。また、明治13年(1880)の国会開設請願署名活動では、3月から6月の3ヶ月で相州全域では2万3千余の署名を集めたが南金目では、全戸数の8割に当たる79名の署名を集めている。
(県下自由民権運動のもう一つ拠点、愛甲郡の厚木・荻野地区であった)。

②この両郡下の民権運動の中心的場所の一つが南金目村であった。同村は当時としては大住郡内では家数百七戸、石高千二百八十三石(明治初、1868年の南金目開闢)と比較的豊かな村であった。その豊かさは、金目川流域の水田地帯と、平塚宿まで約6km、大磯宿まで約10km、矢倉沢往還の寄場曾屋村まで約6kmという経済圏にあって「農閑稼ぎ」にも恵まれていた。このような条件からこの地は江戸時代から寺子屋教育が盛んな地域であった。民権家の宮田・猪俣も南金目の私塾「郁文堂」(師匠は越中富山藩士で遊浪儒学者小林晋斎)で学んだ。

③南金目の民権運動を指導したのが同村豪農出身で宮田寅治、猪俣道之輔、森録三郎の民権運動家トリオであった。当時彼らは20代の青年期であった。そして三人はこの時期から30代に掛けて代わる代わる村長や県会議員の等の要職に就いている。

④彼らは、明治14年(1881)大磯で結成された民権結社「湘南社」で活躍し、同16年金目観音堂で開かれた演説会で宮田と猪俣が植木枝盛と並んで講演を行っている。

④自由民権運動は明治20年代になると解体していったが、彼らを始めとする金目の人々の高い民権意識は教育や福祉へと向けられた。彼らはいずれもキリスト教徒であり、三人は自由民権活動を退いた後も県議・町村長として地域の発展、教育・福祉・生活改善〔養蚕業の導入、県農会（養蚕技術の改良、肥料の共同購入）、女子講習会（縫）〕、洪水対策〕に尽くした。

⑤民権家3人は、何れも活動の余暇に絵画や俳句や書を能くする文化人であったという。後に南金目の人々は、自村を「明治の文化村」と呼び、誇りにしていたという。

⑥自由民権運動の要求（薩長藩閥政府による政治に対し）

- 憲法の制定、国会の開設 ○地租の軽減
- 不平等条約改正の阻止 ○言論の自由や集会の自由の保障など

2. 蓮性山 宗信寺（日蓮宗）～金目自由民権家トリオの一人 森録三郎の墓所

①創建 慶長10年(1605)、本尊 三寶祖師、②開山 日了

③開基 森播磨守吉秀（信長の小姓森蘭丸の末裔。風土記稿に「今子孫に村民あり」とある）

④森録三郎の墓（墓石に第十一代孫一金録三郎次男 昭和四十年九月二十日永眠 八十一才と記されている）

○森録三郎 安政3年(1856)～大正3年(1914) 58才で死去

○明治24～31年県議、35～37年村長。森は書や俳句にも秀でていたという。

○「散るはなを かるふせおふて 春のたび」鶴汀（森録三郎）

「四五日の 今は大事と 菊の花」百亀（六代目森文右衛門～相模俳壇で活躍）

⑤「三郡共立学校発祥地」の記念碑

○明治19年(1886)5月に大住、海陵、足柄上の三郡共立学が南金目村宗信寺境内に創立・開校した。現在の平塚農業高校、秦野高校の前身となる学校で、三郡が町村組合を組織して運営された。青少年の教育と育成に大きく貢献した。

○修養期限は3年で授業は、英・漢・数の三教科であった。なお、神奈川県立3中学はそのすべてが明治30年代(1897～1906)になってからの開校であった。〔一中（現希望ヶ高校）30年、二中（現小田原高校）34年、三中（現厚木高校）35年開校〕

3. 金龍山 寂静寺（天台宗）～金目自由民権家トリオの一人猪俣道之輔の墓所

①創建 不詳、②開山 慈覺貞観6年(865)正月14日卒、中興 典乗

③本尊 三尊弥陀、④慶安2年(1649)6石の御朱印を賜る

⑤猪俣道之輔の墓（昭和三十年四月再建 猪俣直昌）

○墓石右面の辞世の俳句「みのかさも いらぬ しぐれの 旅寝かな」

○猪俣道之輔 安政2年(1855)～昭和15年(1940)享年85才。南金目の豪農森文右衛門の三男に生まれ、八歳の時、同村の猪俣小左衛門の養子となった（森録三郎とは別）。「竹鷄」と名乗って書や俳句に長じていた。また、猪俣は私塾「郁文堂」で学んだ後、小田原講習所に通い、東京へ遊学してドイツ語学んでいる。その後郷里の金目学校等の教職についた。

○明治14年「湘南社」の創立に参加し、伊勢原支社の学習会では国民主権を主張して注目された。翌15年神奈川県議になり、明治19年には宮田等と共にキリスト教に入信し、中等教育学校の設立等に尽力した。また、明治22年には金目村初代村長になった。

○その後キリスト教を捨て、明治43年から大正3年まで平塚町長を務めた。しかし、豪農であった猪俣も晩年は経済的に行き詰まるなど不幸であったというが、彼はどんな心境で辞世の句を残したのであろうか。

⑥秋山博の墓

○秋山博 文久3年(1863)～大正7年(1918)、享年54才。平塚市岡崎(臥崎)に生まれ、幼少期に天然痘に掛かり失明、明治16年(1883)に20才の若さで南金目に鍼灸院を開業。

○秋山の鍼は全国的にも有名になり、明治42年、鍼灸業が試験による免許制になり、これを契機に翌年「私立中郡盲人学校」（現県立平塚盲学校）は設立された。この学校の授業料は無料だったので、学校経営はいつも苦しい状況でした。これを支えたのが宮田寅治を始めとする民権家トリオや地域の人々の熱意であったという。

4. クリスマン墓地～宮田寅治一族はじめクリスマンが眠る共同墓地

①宮田寅治 安政元年(1854)豪農の家に生まれ、昭和13年(1938)没、享年84才。

○明治14年「湘南社」の創立に参加した。金目自由民権家のリーダーとして国会開設運動・地租軽減運動等に加わり明治17年神奈川県議、26年には二代目金目村長になった。また、キリスト教に入信し明治22年(1889)金目教会堂を建てた。県議時代には公娼廃止運動にも熱心に取り組んだ(明治23年宮田の廃娼決議案が県議会を通過)。

○宮田は、三郡共立学校や私立中郡盲人学校(現県立平塚盲学校)の設立運営にも尽力し、同校の三代目校長も務めた。宮田の思想と行動には青年時代に体得した自由民権とキリスト教の精神が涵められることなく息づいていたようである。

○宮田は、村内有数の豪農であったが、広大な土地資産も長年の教育福祉事業のために私財をなげうち、次々と失われていったが、宮田は一向に気に掛けなかったと言う。

②宮田寅治の墓～金目自由民権家トリオのリーダー宮田寅治が眠る墓地

○小高い丘に宮田寅治他金目の信徒を祀るクリスマン墓地がある。その中に「宮田夫妻の墓」があり、墓石には十字を刻み、二人の個人名が彫られている。

○隣には「宮田夫妻の墓碑銘」という巨碑が立っている。碑文の最後に「昭和五年九月吉日七十七翁、宮田鼎田謹書」とある。「鼎田」は宮田の文人画家としての雅号という。

③自由民権運動とキリスト教

○南金目に輩出した民権家を語る場合、キリスト教との関係を見捨てることはできない。猪俣道之輔・宮田寅治がキリスト教信徒になった理由は、湘南講学会の設立などで親交があった中島信行(自由党副総裁、初代衆議院議長)、細川瀧(横浜海岸教会二代目牧師)が熱心なクリスマンであったことから、その影響を受けたものといわれている。

○金目教会堂は、宮田・猪俣らの尽力により明治22年3月横浜海岸教会の伝道所として日本基督教会金目講義所として金目観音の北側に開設された。その後数回の移転後、現在の旧森録三郎屋敷地に移転し現在に至る。

○信徒は、宮田や猪俣の親族が多かったとおもわれるが、多くの村民が信徒になる現実があった。信徒は明治23年までには29名、明治36年12月には43名になっている。彼らは、自由民権とキリスト教に同じような新鮮さを感じたのであろうか。

○下見の時にお会いした地元のキリスト教徒の方によると、長い間に仏教に戻った人もあるが教会は現存している。また、現在では自由民権運動を知る人は少ないが民権運動が当地の戦後の農地開放がスムーズに実施された要因の一つであったのではないかと語っていた。

5. 宮田寅治旧宅～現在は、宮田寅治の孫夫人が居住(第7部分前)。当時は隣の金目小学校(欄)を含む周囲一円が宮田家の敷地で、田畑山林も多く南金目一番の豪農であったという。

6. 金目公民館(トイレ、昼食) 昼食後 講話と懇談

講話「金目の自然・歴史・文化について」池田弘氏(金目エコミュージアムガイドボランティアの会前会長)

7. 大通山 法傳寺(日蓮宗) 会長挨拶・解散⇨北金目バス停⇨秦野駅へ

①創建 天文元年(1532)小田原新久に創建、②本尊 三宝諸尊

③開山 日傳、中興 新通が延宝7年(1679)当村に引移して再建、中興開基村民二人

④県立秦野高校・平塚農業高校『揺籃の地』の記念碑

○中郡 学校 明治32～35年(宗信寺から移転後、同33年中郡共立学校を改称)

○郡立農業学校 明治35～42年(その後改称、現平塚農業学校へ引き継がれた)

○私立育英学校 明治42～大正14年(その後移転し、後に「秦野高校」となる)

○私立盲人学校 大正 3～大正12年(育英学校の校舎を借用。関東大震災で倒壊後に移転平塚盲学校となる)

【参考資料】

○『平塚の文化財』平塚市教育委員会、○『金目の地域から大志を拓く』平塚博物館

○『よみがえる群像』、○雑誌『有隣』第419号『自由民権の里・平塚市南金目』大畑哲

○『平塚市史』3近世資料編、○『かなひ(金目)の歴史』金目まると博物館他

金目観音・南金目自由民権の里 歴史散歩コース



*コース図は『よみがえる群像』から転載（一部修正）

【南金目の自由民権家トリオ】



(左から宮田寅治、猪俣道之輔、
森 銀三郎の各氏)
④ ③ ②

【参 考】

1. 屋根のかたち

寺院建築の屋根の種類は、切妻造・寄棟造・入母屋造・方形（宝形）造の四種が大体基本になっている。その他はこれらの応用や展開又は組合わせである。

- ①^{ほうぎょう}方形造（宝形造）は、屋根は四つの三角形の面で構成されている。ただし、六角や八角の建物では、屋根の面はそれぞれ六面・八面となる。
- ②寄棟造は、三角と梯形の各二面ずつ四の面と、水平の棟によって構成された屋根で、奈良時代に多くつくられ堂々とした感じがする。四注造とも呼ぶ。
- ③入母屋造は、寄棟造の上半部が切妻造となっているような形をしており、一番多くつくられている屋根である。
- ④切妻造は、二つの平面で山形に造られた屋根で、最も単純な形である。わが国古代からあるが、仏教建築ではあまり重要な建物には使われない。



『図解・寺院巡り必携』より転載

2. 「金目」という地名の由来（『中郡勢誌』『かなひ(鉦)の歴史』、地名辞典他）

- (1) 「金目」⇔古くは「かなひ」「かない」「かねえ」などと呼ばれていた。

(事 例)

- ①千須谷「出羽三山供養塔」〈右〉此方かないみち～文化3年(1806)
- ②小鍋島「出羽三山供養塔」〈左〉川下平つか／かなひ～天保12年(1841)
- ③平塚「庚申塔」〈右〉大山道〈左〉かない道～弘化4年(1847)

*『風土記稿』の南金目村の項には、「和名抄」(931～938) 餘綾郡郷名に「金目と載たるは、則此地なるべし・・・」とある。

(2) 「金目」(かなひ) ⇨ 「金目」へ 字形が「日」から「目」に転訛

- ・「金目」は文字通り「かなめ」と言わず「かなひ」と伝承されている。
- ・「かなひ」が正しい呼称で、文字には「金目」と表現された(推測)。
- ・そして語形は元のままで、字形が日から目に転訛して「金目」になった。
- ・即ち「日」の古文「𠄎」が「目」となり「目」になった(推測)。

(3) 「かなひ」⇨「金樋」⇨金目川の水の取り入れ口=金樋口説

「かな」は頑丈さ・立派さを表す美称で、「ひ」は「堤防や樋」の意味。

(4) 「かなひ」⇨鍛冶関係の川沿いの集落説(別説)。「かな」は「鍛冶関係の土地」を「め」は、「川沿いの集落」の意味する。

(5) 「かなえ【鼎】」⇨「金釜」(かなへ) ⇨ (かねえ) 説。金属の鍋の生産地を意味する。

※『新編相模国風土記稿』の厚木七沢村の項に「小名(梓)金目・・」という地名がある。

3. 自由民権運動の歴史(『神奈川の自由民権運動』大畑哲、その他)

(1) 自由民権運動 明治時代に自由と平等と民権(人権)の確立をめざし、民主的な憲法と国会の樹立を要求した政治運動で、わが国初めての民主主義運動であった。明治7年(1874)の民権議院設立(国民の群による議院)設立建白書の提出を契機に始まったとされている。

(2) 自由民権運動の要求 薩長藩閥政府による政治に対して次の要求を掲げ、明治22年(1889)大日本帝国憲法の発布、明治23年(1890)の帝国議会開設まで続いた。⇨①憲法の制定②国会開設③地租税の軽減④不平等条約の阻止⑤言論・集会の自由の保障。

(3) 自由民権運動の経緯

【第1期】明治7年(1874)～同10年(1877)頃～士族民権時代(運動の始まり)

- 民権議院設立建白書の提出の始まる板垣退助ら士族を中心とした、初期の自由民権運動[士族反乱(秩禄処分や廃刀令に反発)と並行して進行]であった。
- 武力を用いる士族反乱の動きは、明治10年の西南戦争まで続いた。

【第2期】明治10年(1877)～同16年(1883)頃～豪農民権時代(運動の高揚期)

- 明治11年に愛国社が再興し、明治13年の大会で「国会開設」に加え「地租軽減」という特に豪農たちの要求を取り上げることで運動は、不平士族のみならず農村にも浸透し、全国的なものとなった。
- 明治10年の地租軽減(3%⇨25%)成功は、農民達の大きな自信となり豪農中心の民権運動は高まり、地主・都市部商工業者にも拡大した(明治6年の地租改正は、収穫量に応じ決められた地価を課税標準とし、税率を3%とし、物納でなく金納とした)。
- 明治14年(1881)自由党(総裁板垣退助)が結成され、神奈川県にも湘南社(本社大磯支社伊勢原・南金目・曾屋等)や相愛社(愛甲郡厚木町・荻野地区)等の支部が設立され、豪農を中心に各地で活発な運動が展開された。

【第3期】明治16年(1883)～同19年(1886)頃～農民民権時代(激化事件と運動の衰退)

- 西南戦争(明治10年)の戦費調達のために不換紙幣が濫発されたことが原因で、戦後に大規模インフレが発生していた。明治14年頃からこれを解消するためデフレ政策が取られたが、この松方デフレ不況で農民の貧富の差が拡大し土地を手放す農民が増え、困窮農民の激化事件(同17年の秩父困民党事件等)が多発したが、軍や官憲に鎮圧された。
- 明治18年(1885)には、大阪事件が発生した。これは自由党急進派の大井健太郎等が朝鮮の改革を計画し、これを利用して日本の自由民権運動を活性化させようとしたが失敗し、多数の民権家が逮捕された(愛甲・高座両郡で10名の逮捕者を出し、元荻野山中学校教師大矢正夫ら5名は資金集めの強盗罪で実刑を言い渡された)⇨民権から国権への変質～また、前年には自由党が解散し豪農層は次第に運動から離れ、民権運動は衰退へ向い、大阪事件以降過激事件は沈静化した。明治20年後藤象二郎らによる大同団結運動を経て議会政治の時代へと移って行く(明治22年大日本帝国憲法制定)。